
とある無力の能力記憶 《skill memory》

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある無力の能力記憶《skill memory》

【Nコード】

N3282Y

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

これは上条当麻が世界を救った5年後の話。

学園都市は更に技術が発達し、それに伴いその闇も更に進化を遂げた。

これは能力記憶を持つ無能力者、スキルメモリ 隴江相馬が学園都市の闇の起こす

事件に巻き込まれていく物語。

意見や感想書いていただけると嬉しいです。

序章〈能力記憶〉（前書き）

結構軽く考えた話なんで、軽く読んじゃって下さい。

序章〈能力記憶〉

総人口二三〇万人。東京西部の大部分を占める巨大な都市。人口の八割が学生というところから『学園都市』と呼ばれている

学園都市に住む生徒達には、超能力を発現させるための特殊な授業が組まれていた。

その能力は、定期的な身体検査システムスキャンによって「無能力（レベル0）」から「超能力（レベル5）」までの六段階で評価されている。

とある少年の話をしよう。

彼はおぼろえ そつま朧江相馬。

この町に住む高校生だ。

能力は『能力記憶』スキルメモリー

一度影響を受けた能力の『自分だけの現実』パーソナルリアリティーを記憶して、自分に応用することが出来る能力だ。

簡単に言えば、それが無能力は勿論、超能力であろうが、あらゆる能力をコピーしてしまう。

「まあ、使えるのは時間制限ありの一度きりでまた記憶し直さなきゃならないんだけどな」

隴江はベンチに座って、先程知り合ったさくやまみちどめ柵山通留に自分の能力の説明をしているところだった。

「へえ、じゃあ俺の大能力の発火能力バイロキネシスなんかもコピー出来ちゃうわけだ」

意外と驚かない柵山に隴江は更に説明をしていく。

「ただこんな能力だから身体検査では無能力者判定されてしまうんだよな」

落ち込む隴江に構わず柵山は質問をしていく。

「でもさあ、自分だけの現実ってコピー出来るもんなの？」
もつともな質問だ。

「普通は出来ないんだが俺の場合は俺の自分だけの現実を利用することが出来ないみたいで、能力の影響を受けた時に毎回上書きされるらしい。俺はその上書きされたものを使えるわけだ。」

自分だけの現実が使えない。という点に驚いたのか小さく声を出す柵山。

「成程ね。それじゃこんな攻撃も効かないかな？」

刹那、彼の能力によって隴江の座っていたベンチが爆発した。

間一髪のところかわした隴江だが軽い火傷をおってしまった。

「何のつもりだ、テメエ」

「行動のままだけど？」

なおも爆発を繰り返す柵山は不気味な程の笑顔でこちらを見てくる。

「くそっ！」

隼江は周りに被害が及ばないように記憶していた水分操作の能力を使い火を消していく。

「ふふ、面白いやつだね。」

また会いたいな。」

そんな台詞を残して、柵山は一瞬にして姿を消した。
しかし彼の能力は発火能力。
一瞬にして消えるはずがない。

（屋気楼か何かか…。

どっちにしろもう近くにはいないか

…。）

隼江は諦めて、消火作業に注力する。

その後、隼江は通報されて来た警備員アンチスキルに事情を聞かれたが、彼の無実が証明されるとすぐに解放された。

その夜、隼江は第七学区の寮の彼の部屋のベッドに寝転び思う。
必ずこの事件は自らの手で解決する

と

序章〈能力記憶〉（後書き）

いやあ、途中で力尽きて柵山を倒すはずが延期にw

まあ序章なんで、これから楽しみにしてて下さい。

一章へ多才能力者 #1 (前書き)

タイトルからわかる人は分かります。

一章〈多才能力者〉 # 1

次の日から隴江は柵山通留についての情報集めに入った。

書庫^{バンク}で検索をかけるとすぐに見つかった。

（発火能力の大能力（レベル4）か…）
昨日柵山が爆発を起こせたのは、あらかじめ爆薬等をセットしてあったからだろう。

隴江は第七学区の路地を歩きながら考える。

（そういえば昨日、あいつの炎で火傷したっけ…）
つまり柵山の発火能力が一度だけ使えるようになっていたということだ。

（相手の攻撃を受けないと記憶できないのが不便だなあ）
相手の能力の影響を受けないならないということは、相手の攻撃を受けなければならないことになる。

つまり、一撃目で負ければ意味がないわけだ。

そんなことを考えているうちに隴江は、昨日柵山に襲撃された辺りに着いた。

そこはすでに修理され綺麗になっており、よく見なければ修理したてということはわからないぐらいだ。

（さすが学園都市。こういう作業は無駄に早いな）

つまらないことを思いながら何か手掛かりがないか探す。

「おっ」

隴江が見つけたのは、そこら辺の電器店で買えるような緑色をしたUSBメモリだった。

隴江は自室に帰って、ほとんど使わなかったため埃を被ったパソコンを起動させUSBメモリの中のデータを見てみる。

データは一つしかないが、MP3形式でタイトルは英語で表記されている。

「何て書いてあるんだ？」無能力（レベル0）である隴江に読めない程度に難しい英語のようだ。

（しかしMP3つてのが気になるな…）

彼は少し考えたあと、とある人物に電話を掛けた。

朧江は第七学区のとある女子寮の一室に来ていた。

「んで、解析して欲しい音楽データってのは？」

問いかけてきたのはキヤスター椅子に座り、腕に風紀委員の腕章を付けた少女。

朧江の幼馴染みである鴉奈御船だ。
からすな みふね

彼女は幼い頃から複雑なハッキングプログラムを開発するほどの天才ハッカーで、現在は風紀委員となり対サイバーテロ要員として風紀委員の各支部から重宝されている。

一時期はあの『ゴールキーパー守護神』と共に仕事をしていたこともある程だ。

「ん、ああ、これだ」

と例のUSBメモリを御船に渡す。

御船は臙江からUSBメモリを受け取ると、キャスター椅子を足で半回転させてパソコンに向かった。
早速解析を始めたみたいだ。

「相馬あゝ、このデータ、解析に時間掛かりそうだよ。二十四時間位」

告げる御船は何故か笑顔だ。

「元々、時間が掛かることはわかった上で頼んでるんだ。任せたぞ」

「任せなさい！」

と答える御船の指は既にキーボードを叩き始めている。

臙江は依頼料である甘納豆を部屋の中央にあるテーブルの上に置いて御船の部屋を出た。

（ほんとあいつはプログラムと甘納豆は大好物だよなあ。安上がりでいいんだけど）

今まで臙江が御船にしてきた依頼もすべて報酬は甘納豆だった。

現在は午後2時である。

臙江は空腹を感じたので、近くのファーストフード店に入って軽く昼食をすませた。

朧江はもうその日は無闇に行動せずに、御船の連絡を待った方が得策と判断して自分の寮に帰ることにした。

その帰り道。

偶然、女子高生二、三人が話していることが耳に入ったのだその内容が気になるものであった。

「最近あの『幻想御手』^{レベルアップ}がまた流行りだしてるらしいね」

「『幻想御手』って五年前のあの？」

「確かあれ副作用で人がたくさん病院に運ばれたんじゃないかってっけ？」

「今回ののは副作用とかはないみたいだよ。1日ぐらいで効果は消えるらしいけど」

朧江は彼女達を通り過ぎた後に立ちすくんだ。

「『幻想御手』だと……………」

次の日の午後1時頃に隴江に御船から電話がかかってきた。
電話に出た瞬間

『ちよつと相馬！？今すぐ来なさい！今すぐ！』

何故か凄く動揺している。

「今そつちに向かつてるところだ。すぐに着く」

『わかった！待ってるからね！』

通話が切れた。

「ったく」

隴江は急いで御船の部屋に向かうことにした。

「それじゃあ、解析結果を報告します」真剣な表情で話す御船。

「このデータは五年前の『幻想御手事件』のものを元に作られた新

『幻想御手』ってところね」

『幻想御手』と聞いて少し顔色が悪くなる隴江。

「んで？」

続きを話し始める御船。

「今回は副作用で意識がなくなることはないみたいね」
それだけが安心できるところだ。

「そしてもう一つ」

御船は一つ大きく息を吸って、

「聴いた人の脳波を一定の周波数にする事で脳をリンクさせて特定の人物に様々な能力を使えるようにするのよ」

「なっ……！」

信じられない事を言われ驚愕する朧江。

「つまり『デュアルスキル多重能力者』になれるってことか」すぐに冷静になり質問する。

「少し違うの。これはあくまで脳をリンクさせて巨大なネットワークを作り出すだけのもの。つまりは『マルチスキル多才能力者』になるの」

その言葉に朧江が初めて耳にする単語があつた。

「マルチスキル？」

「ええ、『多才能力者』って言うのは、五年前に研究者の木山春生が作り出した『幻想御手』によって生み出された、能力者のこと。」

頻繁にニュース等を確認している朧江には、木山春生という名前には心当たりがある。

「木山春生ってあの第三位の『レールガン超電磁砲』が解決したっていう事件の犯人だろ？」

御船が少し驚いたような顔をする。

「ええ、そうよ」

「つまり、その木山春生が最初の多才能力者って訳か」

「でも彼女は今は普通の人として脳波関係の機材開発に協力しているの」

「てことは他の誰かが多才能力者の研究を続けてることになるな……」
結論を述べる。

朧江はそれがわかったことに少し満足したように立ち上がった。

「ありがとう御船、助かったよ」

朧江が玄関のドアを開けたとき、白い色をした下駄箱の近くにいた御船がはっとした表情で

「あつ、それとその多才能力者が誰なのかなんだけど」

二人の間に少しの沈黙。

「教えてくれ」

意識せず唇を舐める。

「脳波データを使って、書庫で調べただけ」

「柵山通留っていう高校生らしいよ」

点と点が繋がり、一本の線になった。

一章へ多才能力者》 #1（後書き）

超電磁砲の話をもとに作った話ですね。

相馬初の事件にしては大きすぎたかも知れませんw

感想や指摘、アイデアなどあれば書いていただけるとありがたいです。

《多才能力者》 #2 (前書き)

なんか収集つかなくなってきた

《多才能力者》 #2

隴江相馬は、鴉奈御船から教えてもらった情報を元にして第十八学区で柵山通留を探していた。

御船の情報によれば柵山はよくこの第十八学区や第七学区の『学舎の園』に現れて、『幻想御手』を広めているようだ。

どちらも能力開発は学園都市内でトップを争う場所なので、柵山は自身がレベルの高い能力を使えるようにしようとしているのだろう。

（くそ、なかなか見つからねえな）

そんな事を考えながら誰もいない裏路地を歩いていると、目の前の空間に電撃が迸った。

バリィ！

隴江は一步後ろに下がって避けるが、電撃の余波を受けて二メートルほど飛ばされる。

「がはっ！」

肺の中の酸素が全て出ていってしまいそうなほど強い衝撃が隴江を襲う。

カツ、カツ、カツ…
足音が近づいてくる。

隴江がその方角を見ると、人影があつた。

柵山通留だ。

多才能力者である彼には電撃を放つことも可能だろう。

「やあ、また会ったね」
不敵に柵山が言い放つ。

「デメエ！」
隴江は彼を睨み付けるが、まだ先程の攻撃が効いたのか反撃はできないようだ。

「ふふ、まだ動けないようだね」
柵山はあからさまに挑発をしてくる。

「デメエは何が目的でこんなことをしてんだ！」
隴江は『幻想御手』の件から積もりに積もっていた怒りを爆発させる。

するとその言葉を聞いた柵山は隴江を睨み付け、
「目的？君に話す必要なんて無いだろ？」
柵山が初めて怒りをあらわにする。

（俺と同じように過去に何かあったのか…？）

しかしそんな事を気にしている場合ではない。

ようやく動けるようになった隴江は立ち上がり、ストックしていた肉体強化系の能力を使うと柵山に突っ込んでいった。

隴江は強化された脚の筋肉を使い地面を蹴ると足下のアスファルトが少しえぐれていく。

しかし隴江の視界から柵山が急に消えた。

「なにっ！」

かなりの勢いをつけていた隴江は止まれず壁に激突する。

「うぐっ！」痛みにうめき声を漏らしてしまう。

「僕はこっちだよ」

背後から聞こえた声に隴江が振り向くと柵山がそこにいた。

「『テレポート空間移動』も使えるって訳か……」

「正確には『ファイアポイント火炎移動』だね。自分自身の力じゃ座標指定ができないから火の位置情報を元に移動する能力だよ。僕の発火能力を利用して、火を起こした地点に移動出来るわけだよ」

「それは消防士になった方がいいんじゃないのか？」

「冗談を言っている暇があったら自分の身を心配した方がいいんじゃないかな？」

その台詞を放った直後に柵山は隴江に向けて電撃を放つ。

隴江の目の前に電撃が走る。

避けない。

バリバリイ！

隴江に電撃が直撃した。

「ぐ……うあああ！」
叫ぶ。

いくら大してレベルの高くない電撃とはいえ、一万ボルトは軽く越えているはずだ。

だが隴江は避けなかった。

その電撃を自分の能力とするために。

「なにつ！」

柵山はその行動に驚きを隠せない。

立ち上がる。
 臙江はすぐさま、ストックしてあった『オートリバーズ肉体再生』を使い傷を治し、

隴江はすでに肉体強化が切れているがそんな事は気にせず薄暗い路地を駆けていく。

「うおおおおあ！！」

その右手に少しずつ電気が溜まっていくのがわかる。彼が先程記憶した能力だ。

朧江は電撃を纏わせた自分の拳を握り締め、柵山の顔面を目掛けて振り上げる。

「つ！」

不意をつかれた柵山は避けることが出来ない。

「喰らえええええ！」

バキイ！

彼の電撃を纏った拳が柵山の顎を捉えた。

同時に。

バチツ！

電撃が柵山を襲う。

柵山は煙を上げながら三メートル程吹っ飛び、更に四メートル程地面を転がった。

そんな柵山に隴江は叫ぶ。

「お前が何で多才能力者になったかなんて知らねえ！けどな、それで他人を傷付ける事は俺が許さねえ！！」

そう…、五年前に『幻想御手』のせいで大切な人を無くした人は大勢いる。

隴江もその痛みを知る者の一人なのだから。

「お前に僕の何が分かるって言うんだ！！」
それでも柵山は立ち上がる。
脚を震わせながら、顔を歪ませながら。

「僕は、あいつらを助けるためにこんな怪物になったんだ！」

自分が多才能力者になった理由^{わけ}を叫ぶ。

しかし隴江は、それらを全て打ち消すような台詞を放つ。

「だったら俺は、お前を助けてそいつらも助ける！」

「っ！」

柵山が自分を犠牲にしても出来なかった事。
それを隴江は助けると言った。

「じゃあこんな怪物の幻想を叶えてくれよ！」

叫び、柵山は走り出す。

握られた手に炎が灯る。

隴江も走り出す。

「叶えてやるよ、お前のその幻想、俺が必ず！」

初めて会った時に記憶した発火能力を使い、己の拳にも炎を燃え上がらせ、駆ける。

二人の腕が交差した。

そして

.....。

ドサッ。

人が倒れる音がした。

倒れたのは柵山通留だった。

隼江が呟く。

「.....終わったか.....」

直後、隼江も倒れた。

《多才能力者》 #2 (後書き)

まだ多才能力者編は続きますよ！

閲覧してくれる人が少ないのが残念です

《多才能力者》 #3 (前書き)

またも短くなってしまいました…。

《多才能力者》 #3

隴江相馬が目覚めたのは病院のベッドの上だった。

「あつ、目が覚めた？」

ベッドの端に座っていた鴉奈御船が声を掛けてくる。

「何でお前が…」

「あんたに電話しても出ないから第十八学区に探しにいったの。そしてたら柵山って人と二人、倒れてたのよ」

御船が指差したのは隣のベッドだった。

そこには柵山が寝ている。

どうやら向こうの方が重傷のようだ。

「彼が幻想御手事件の犯人だったの？」

「実行してたのはな…。だけど犯人は別の奴だ」

「じゃあ彼はなんだったの？」

答えられない。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙の時間が流れる。

その沈黙を破つたのは隴江でも御船でもない。

「僕は置き去り（チャイルドエラー）だったんだ」

二人は驚いて声のした方を見る。

声の主は柵山だった。

寝たまま天井を見つめている。

「置き去り……」

置き去りとは学園都市の外から親が子供を捨てるために学園都市の寮に放り込む行為、またはそうされた子供の事を差す言葉だ。

「まあ、それである研究施設に拾われてそこで多重能力者の研究材料^{モルモット}として使われていたんだよ」
過去にあったことを思い出したのか柵山の表情が歪む。

（人に自分の事をモルモットなんて言わせるなんて……）
怒りが朧江の心の底から滲み出てきた。

「まあ、そこで友達も出来ただけだね。そしたら、すぐに一人に注力して多重能力者を作ることになってね……。一番能力に素質があった僕が選ばれたんだ。」

無理に笑顔を作り朧江達に心配させまいとする。

「だったら何で多才能力者になったの？」
御船が尋ねる。

「その実験の過程で完璧な多才能力者を作るって話になってね。僕があんなことをした理由の『1つ』がこれだよ。」

隼江には『1つ』という言葉が引つ掛かった。

「もしかして他にもあるのか？」

すると予想外の答えが返ってきた。

「隼江くんを捕らえる。これがもう1つの理由だよ」

「なっ！」「えっ？」

思わず声が出てしまう二人。

「君の能力、『能力記憶』は多重能力に近い能力らしいんだよ。それで命令されたんだ。隼江相馬を捕らえろ、そうしなければ他の実験道具はすぐに生ゴミ送りだ。って」

柵山がその台詞を言い終えた直後。

ダンッ！

隼江が立ち上がった。

そのまま部屋の出口に向かって歩き始める。

「ちょっと相馬、何やってんの！？」

御船が止めようとする、だが止まらない。

部屋から出ていく直前に隼江は柵山に聞いていった。

「その研究施設ってなんて名前だ？」

「第十学区の逢坂脳波研究所だけど…」

朧江は第十学区に居た。

柵山の友達を助けるために。

柵山の幻想を叶えるために。

彼は逢坂脳波研究所のドアを己の力でぶち破った。

ジリリリリリリリリリリ！！！！

すぐに警報が鳴る。

朧江は構わず入っていく。

しかし誰も出てこない。

（無人研究施設なのか？）

最近はそういった研究所もある。

しかし違った。

近くから声が聞こえてくる。

朧江は声が聞こえた方向に向かって歩いていく。

「この部屋からだな……」

ドアノブを回した

《多才能力者》 #3 (後書き)

もう少し長い方がいいですかねえ。

感想、アイデア、合作者募集

《多才能力者》 #4 (前書き)

収集できましたかねえ。

《多才能力者》 #4

ドアを開けた先に居たのは、一人の少年と白衣を着た研究者らしき男だった。

研究者がこちらを向く。

少年は薬かなにかで気を失っているらしく反応はない。

「な…何者だ貴様！」

「俺か？俺は『能力記憶』の隴江相馬だ。お前たちが欲しがってた能力だぜ？」

挑発する隴江。

その言葉を聞いて研究者は落ち着きを取り戻す。

「そうか貴様が『能力記憶』か…。貴様さえ居れば多重能力者計画が完成する…！」

ぶつぶつ言いながらこちらにフラフラ歩いてくる。酔っ払ったような歩き方だが、何か薬でも使っているのかも知れない。

次の瞬間。

研究者が隴江の視界から消えた。

直後、彼の真横から衝撃。研究者が隴江の脇腹に蹴りを入れてきたためだ。

よほど威力があつたのか、三メートル程吹き飛び壁にぶつかる。
「ぐふっ！」

肺から全ての酸素が出ていってしまいそんな衝撃が彼を襲う。

しかしすぐさま体勢を立て直し状況の分析を行う。

（あいつは一瞬で移動して俺が吹き飛ぶ程の蹴りを入れてきやがった…）

しかし研究者は彼の思考を待つてはくれない。またも一瞬にして朧江の視界から消える。

警戒する朧江だが、背後から膝蹴りが彼の背骨に衝撃を与えた。

「ぐはっ！」

まため吹き飛ぶが今度はストックしてあった念力使い（テレキネシス）の能力を自分に使い、空中で止まる。

「ハハッ、君の能力はそんなものか」

研究者は嘲笑いながら朧江に近づいてくる。

だが朧江は痛みに耐えながら思考を再開する。

（あいつにこんな身体能力があるとは思えない…）
結論は

「お前、多才能力者か…」

「当たり前だ、『能力記憶』。しかしそれがわかったところで貴様が俺に勝つことは出来ないんだよ」
それは勝利宣言。

しかし彼は知らなかったただけだ。

『能力記憶』、朧江相馬の全力を。

笑う。

腹の底から笑いが溢れてくる。

研究者は少し警戒するが朧江は何もしてこない。

彼は笑いがおさまると呟いた。

「なあ知ってるか、俺の能力の欠点」

研究者はそれに返答する。

「貴様は記憶した能力を一度限り、しかも時間制限つきでしか使えないのdarou?」

敗北までの時間稼ぎと判断した研究者はニヤリと笑う

「当たり前だ。けどな、一つだけ忘れられない能力があるんだよ」

彼は叫ぶ。

その能力の名を。

「ライトニング『雷光共鳴』!!」

研究者の視界から朧江が消えた。
次の瞬間には。

彼は倒れていた。

「な……にを……」

最後の力を振り絞ったと言っても違和感のない声で言う。

彼の視点から見れば隴江は、

『消えた』

ただそれだけ。

彼は自分が何をされたかすら理解していない。

違和感といえば彼の身体がまるで感電したかのように痙攣しているだけ。

「見ての通り、感電させたただけだ」

これが隴江の全力。

『能力記憶』の『例外』^{イレギュラー}である忘れることが出来ない能力。

「消える…感電…、『雷光共鳴』…。まさかお前、あの事件に何か関係が!？」

何かを推測し始める研究者だがそれが隴江の過去を掘り返す結果となつた。

「それ以上言うな」

その言葉を聞いた直後、研究者の記憶は途絶えた。

「それでそんな無茶したわけ！？ばつかじゃないの！！」
御船が臙江に説教している。

「でも結果的には置き去り（チャイルドエラー）の奴らを助けることができたし、その研究所の連中が行った実験は違法だったわけだしお咎め無しだぞ？」

元気に喋る臙江は御船の部屋のベッドに寝ている。

二日前、第十学区の逢坂脳波研究所は原因不明の怪電波により機能停止し、アンチスキル研究員たちは警備員によって逮捕された。

柵山の友人である置き去り達は警備員に保護され、ちゃんとした寮に入れたらしい。

その事に対して柵山は礼を言いに来た。

「ありがとう」と。

彼にもう会うことはないかもしれない。

そんな臙江も昨日は警備員に状況を説明したりしなければならなかったため警備員の詰め所に泊まったのだ。
しかしあのような激闘の後だったため現在は立つことも辛い状態だ。

会話は続く。

「まあ、そうだけど…。てかあんたあの能力使ったわけ？」

「う…、悪いかよ…」

「悪い！私があんたのことどれだけ心配したと思ってんの！？」
声を張り上げて言う。

「心配？」

その言葉を聞いた瞬間、御船の顔が真っ赤になった。

「ばばば馬鹿じゃないの！？あんたのことなんて心配するわけないじゃん！？」

（すげえ急速赤面スキルだな…）
感心する朧江。

しかしすぐに落ち着いた御船は

「でも、恐かったんだよ…、また大切な人を失うのが…。」

彼女の瞳から一筋の涙が流れた。

「大丈夫だ。俺はずっと御船のそばにいてやる」
姫を護る騎士のように。

あんな悲しみを二度と味あわせないために。

その日、隴江相馬は自分の寮には戻らなかった。

とある研究機関にて

「第十学区の逢坂脳波研究所のカメラに映ったものなんだが」

「これはあの『雷光共鳴』ではないか…」

「これは利用価値がある」

第七学区の窓のなくドアもなく階段もない異様なビルの中

培養液に満たされた生命維持装置らしき機械の中に『人間』が浮かんでいる。

『人間』以外に表現しようのない生物。

銀色の髪を持つ『人間』は男にも女にも見え、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

彼は培養液の中で呟く。

「『二次候補』セカンドプランは順調に進行しているようだな

」

『二次候補』という謎の単語。

「『能力記憶』が予想外の動きをするが許容範囲内か。今後面白い働きをしてみよう」と

『能力記憶』 朧江相馬。

彼を中心とし、学園都市の闇が動き始める

《多才能力者》 編END

〈多才能力者〉 #4 (後書き)

なんかもうワケわかんなくなりました。

『雷光共鳴』に『二次候補』でしょ、それに暗部まで登場するみたいなことを仄めかしました。
後悔はしていない。

めんどくさくなったら打ち切るから大丈夫ですがね。

感想、アイデア、合作者募集中

二章〈能力暴走〉 #1 (前書き)

み…短けえ…

二章〈能力暴走〉 #1

新『幻想御手』事件はとある無能力者の手によって解決したが、学園都市にはまだ深い闇がある

5月だ。

5月といえばゴールデンウィークがあり、今はその二日目である。

その日、無能力者の朧江相馬は第六学区の遊園地に来ていた。

「そつまー、早く早くー！」

鴉奈御船といっしょに。

「ちょ、ちよつと待ってくれ…」

御船を追いかける朧江は顔が真っ青になっている。

事の顛末を説明するところなる。

昨日、ゴールデンウィークなんて何もすることのない隴江が家でごろろしていたところ、やはりすることのない御船から遊園地に誘われたことが始まりだ。

それが何で顔面蒼白に繋がるのか。

遊びに来た遊園地が普通の遊園地ならよかっただろう。

だが彼等が今いる遊園地は絶叫系ばかりを集めた、遊園地大好きっ子でも来ないような地獄のアミューズメントパークだったりする。

元来、絶叫系が苦手な隴江には生き地獄のようなものだ。

しかし御船は絶叫系アトラクション大好きっ娘である。

そんな二人の遊園地での相性は最悪。

そして今、彼等はこの遊園地でも最悪といわれているジェットコースターに乗っている。

何故最悪か。

実はこのジェットコースター、磁力を使いリニアモーターカーの原理で動かしているため、^{スベック}レールがないのだ。しかも恐怖度は普通のジェットコースターのそれを遥かに上回る。

そんなジェットコースターに乗って隴江が無事で済む筈がない。

その日、学園都市にとある無能力者の断末魔が響いた。

遊園地からの帰り道。

朧江はすでにボロボロの身体を引きずるようにして御船についていく。

「全く、男のくせに情けない…」

「仕方ないだろ、絶叫系だけはホントに駄目なんだから」
大きく溜め息をつきながら答える朧江。

「あつ」と声を出して急に立ち止まった御船がとても素敵な提案をしてくる。

「じゃあ甘納豆奢ったげるよ!」

「それで復活するのはお前ぐらいだ」的確な突っ込みをいれる朧江を放置して、御船は近くのコンビニにダッシュして行った。

「ちょ、要らねーのになぁ」

仕方無いので御船を待つことにした朧江だったが

ドオオオン!!

爆音。

ただの爆発ではない。高位の能力を使ったものだろう。

「近いな、二百メートルぐらいか」

隴江はすぐに爆発のあった方角へ駆けていく。

隴江はそこそこ広い通りに出た。

爆発現場はこのようだ。

煙が立ち上がりその中心に一人の男が立っている。

この学園都市の『超能力者』の一人、『灼熱地獄』^{フレイズヘル}の大学生、赤嶺^{あかみね}煙路^{えんじ}。『灼熱地獄』とは発火能力系最強の能力で一万度近い温度の炎を作り出せる。

更に炎や温度を吸収するので発火能力者ではまず勝つことは出来ない。

学園都市はここ数年で『超能力者』を十五人にまで増やした。彼はその中の第十三位だ。

赤嶺はどうやら自我が無いらしいが、頭につけたヘッドフォンが関係しているのかもしれない。

つまり、能力を使っているのも彼の意味ではないはずだ。

『灼熱地獄』の男は通りにある物を片っ端から燃やし尽くしていく。

隴江がそんな惨状を目の前にして放っておける筈がない。

考える。

（俺のストックしてる水流操作能力じゃ超能力者の炎は消せねえ。
なら酸素を奪えば！）

攻略法を見つけた瞬間、すぐに行動を開始する。

隴江はストックしてある『空力使い（エアロマスター）』の能力を
使い炎の周りから酸素を遠ざけていく。

叙々に小さくなる炎。

しかし、

超能力者はそこまで甘くない。

ドオオン！

隴江の目の前に爆炎があがり吹き飛ばされる。

彼は宙を舞うが『灼熱地獄』は記憶した。

そのまま『雷光共鳴』を使い反撃にうつる。

自身の身体を電気に変換し空中から消え、そのまま赤嶺の目の前に
現れ彼の顔面に膝蹴りをいれる。

「喰らえええええ！！」

三メートル程吹き飛ぶ赤嶺だが、さすがに今の一撃では倒れない。

起き上がり、辺りに炎を撒き散らす。

「ぐうつ！」

何度もその炎に当たり身体中に火傷を負う隴江。

これが『灼熱地獄』。学園都市第十三位の實力。ただの無能力者が勝てる筈がない。

『ただの』なら

隴江は激痛が走る身体を無理矢理動かしながら『雷光共鳴』を使い赤嶺の真後ろの空間に瞬間的に移動し、彼の脇腹に全力で蹴りを繰り出す。

赤嶺は真横に飛ばされるが隴江の脚に皮膚が燃え上がるような痛みが走る。

赤嶺が蹴られた部位のみの温度を急激に上げたのだ。

「ぐあああああ！」

耐えることの出来ない激痛に声を張り上げる隴江。

しかしすぐに『肉体再生』を使い痛みを和らげ赤嶺に電撃を放つ。しかしその電撃は炎の壁に阻まれてしまう。

しかし赤嶺の頭部には強い衝撃。

電撃を囫にした隴江が瞬間的に移動し、彼の即頭部にドロップキックを喰らわせたためだ。

赤嶺は何メートルか吹き飛んだあと気絶したらしく起き上がっては来なかった。

フラフラした足取りで彼に近づいていく隴江。

「取り敢えずヘッドホンを外さねえと……」

彼は赤嶺が頭につけていたヘッドホンを外す。

「これは御船に調べて貰わねえとな……」

呟いた瞬間に崩れ落ちる隴江。

彼は意識が薄れていくなか、ヘッドホンから聞いたことのない男女が会話する声を聞いた。

二章〈能力暴走〉 #1（後書き）

はい、初めて超能力者が出てきた上に十五人に増えてやがるってことで。

まあ、#1から超能力者出てきたり、相馬がボロボロになったり大変ですねえ。

引き続き、感想、アイデア、合作者募集中です！

《能力暴走》 #2（前書き）

今回は文章に気をつけてみました。

どうでしょうか

《能力暴走》 #2

朧江はその後駆けつけてきた警備員アンチスキルによって病院に搬送され、火傷の治療などが行われた。

彼が運ばれた病院にはカエル顔をした『冥土帰し（ヘウ）ンキャンセラー』と呼ばれている医者があり、一部の人間からは「学園都市では最高の腕」といわれている。

その病院のとある個室。

「しかし『超能力者』が暴走するなんて学園都市初じゃないのか？」
そんな病院で御船に世間話を始める朧江。
勿論、ご立腹である御船サンがそんな世間話に耳を貸すはずがない。

「あんたそんなこと言ってるけどまたあの能力使ったんでしょ！？
ホントにバカじゃないの！？」

最近は怒ってばかりの御船である。
だが空気の読めない朧江は

「お前って最近怒ってばっかだよな」

「……………」

御船が沈黙する。

（しまった…）

思ったことをそのまま口に出してしまい、直後に後悔する朧江。

ニコッ

完璧な微笑みを見せる御船だが、完璧であるが故に演技だとわかってしまう。

「朧江く~~~~~ん？」

完璧な笑顔とともに朧江の名前を呼ぶ御船。
呼び方がおかしいのは気のせいだろう。

「はっ、はいっ！」

つい敬語で返事をしてしまう朧江君。

「それはあんたが心配させるからでしょうがああああ!!」

怒り狂う御船を止める手段は怪我をしている彼にはない。というか怪我をしていなくても止めることは出来ないのだが。

「え、ちょ、俺は怪我に
最後の言葉を残す。」

とある無能力者の本日二回目の断末魔が病院に響いた。

午後四時になった。

御船によれば、赤嶺は洗脳された疑いがあつたらしくあのあと、とある研究施設で検査することになったらしい。

（つまりあれは能力が暴走したっていうより、誰かに操られていた可能性の方が高いわけか…）

朧江は、御船が帰ったあと病室のベッドで自分の置かれている状況を理解する。

「それにしても超能力者って以外と倒せるもんだな」

呑気なことを言っているが『無能力者』が『超能力者』を倒した前例は五年前にあった二度だけだ。

一つ目は、スキルアウトのリーダーになったり学園都市の暗部で仕事をしていた無能力者が、当時の第四位の超能力者を。

二つ目は、本当にただの無能力者が、現在も学園都市の二三〇万人の頂点に君臨している『一方通行^{アクセラレータ}』を。

倒したのが第十三位であろうが『無能力者』である朧江が『超能力者』である赤嶺に勝ったのは事実だ。

（あれは俺を誘ってるように見えた…）
朧江は思う。

彼がいた近くで事件が起きたこともあるが、無差別に通りにあったものを燃やし尽くす赤嶺を放っておくことが出来ない性格であることを知っているかのようにだった。

つまり彼を知っている人物が犯人の可能性がある。

彼はその考えを否定するように何度か横に頭を振ったあと、目を瞑り寝息をたて始めた。

柵山通留は深夜の第七学区の大通りを歩いていた。

別に夜遊びがしたいわけではなく、ただ単に寝れないので少し散歩をしていただけだ。

彼は現在のはただの高校生として学校に通っている。

勿論『多才能力者』などではなくどこにでもいるような『発火能力者』として。

彼の友人達は現在、色々な教師の家に居候させてもらっている。

一度挨拶に回った柵山だが、身長135センチでランドセルが標準装備とは思えない見た目十二歳の幼女が教師と聞いた時には本気

で夢だと思ったりした。

（今頃、隴江君はどうしてるのかなあ）

自分を救ってくれた人のことを考えながら歩いているうちに、いつの間にか大通りから外れてどんどん細い路地に入っていく。

突然、彼の目の前に三つの人影が現れた。

柵山から見て、右から男、男、女という並び方。

三人のうち両端の二人は高校生くらいに見えるが、中央にいるもう一人は中学生のようだ。

三人とも別々の格好をしているが、一つだけ共通点がある。

頭にヘッドホンを着けていること。

三人が三人ともまるでそれが当たり前のように全く同じものを着けている。

柵山がその違和感に気付いた直後、中央の中学生が右手を彼の方へ向ける。

次の瞬間には彼の身体の数センチ右の部分に電撃が走った。

「っ！」

彼らが敵と悟った柵山は反撃に移る。

自らの掌に炎を生み出しそれを右端の男に向かって放出する。

右端の男は水流操作系の能力者らしく、自身の目の前に水の壁を作

る。

ドオオオオオオン！！

水と炎がぶつかり、小規模な水蒸気爆発が起こり大量の水蒸気で視界が真っ白になる。

（今のうちに彼等を無力化する！）

柵山はその隙に彼等の後ろに回り込み片膝をたてて座り、アスファルトの地面に手を密着させる。

彼の掌から、まだ視界が悪く柵山を見つける事ができていない三人組の方に向かってアスファルトに赤い線が伸びてゆく。
彼等の足下にそれが伸びきった瞬間、その線に沿って炎が吹き上がった。

真っ赤に熱されたアスファルトの欠片が飛び散る中、彼等は

立っていた。

「なっ！」

驚愕する柵山。

多分、三人分の能力を組み合わせ生き延びたのだろう。
それでも傷の一つや二つ出来ていなければおかしい。しかし彼等は

無傷で立っている。

そして柵山との闘いに飽きたかのように、三人は柵山に背を向け歩き始める。

彼等はそのまま夜の闇に消えていった

窓の外から聞こえてくる轟音で隴江は目を覚ました。
窓の外は真っ暗で、時計を見るとA M 2 : 1 5とデジタル表示されている。

電波時計だろうから間違っていることはないだろう。

先程響いた轟音が気になった彼はベッドから起き上がりベッド下に置いてあるスリッパを履き窓際に向かう。

そこからでは暗くてよく見えないがどこかで煙があがっているようだった。

「こんな夜中に火事か何かか？」

現在の学園都市では火事は殆どない。年に一度か二度あるくらいだろう。

そんな環境で深夜に火事など起こる筈がない。

しかし昨日の出来事で疲れきっていた朧江は思考がそこまで辿り着くことはなく、スリッパを元の位置に戻し自らのベッドで眠ってしまった。

現在は午前三時十分。

鴉奈御船は自室でノートパソコンのキーボードをその細い指の先で叩いているところだった。

そのノートパソコンは彼女がこの前買い替えた最新のノートパソコンで、最近特に売れているらしく読み込みに殆ど時間がかからないのが人気の理由らしい。

ノートパソコンの画面には『バンク書庫』の情報閲覧画面が映っている。

『ジャッジメント風紀委員』の仕事でハッキングがないか監視する作業と同時に、『マリオネット洗脳能力』とそれに準ずる能力者の検索を行っているのだ。

「ふわあああああ」

ここ数日『風紀委員』の仕事が忙しく、ろくに寝ていない御船は背伸びをしつつ大きな欠伸をする。

「情報が少ないからなかなか絞りきれないなあ」

彼女は昨日の事件の犯人を特定するために『洗脳能力』を使える能力者を検索しているのだ。

しかし『洗脳能力』は稀少な能力であり、発現した生徒も殆ど変わらない能力なので特定のしようがない。

ピピッ

時計が午前三時三十分の合図を鳴らす。

三十分置きに音がなる時計なので、寝るときは設定を解除して寝ないとすぐに起こされてしまうような曲者の時計だ。

その音を聞いてキーボードを打つ手を止める。

「取り敢えず今日は寝るかあ」

そう言つてノートパソコンを閉じた御船は、時計の設定を解除し、ベッドにダイブした

第十八学区のとある学生寮。

その一室には大量のヘッドホンが置かれている。

その全てが同じ種類のもので見ていると気味が悪くなってくるほどだ。

他の部屋の住人はその気味の悪さが嫌だったのか、この寮にはその部屋にしか住人は入居していない。

その部屋の住人はあまり帰ってきていないらしく、一部の足跡を除いて部屋の殆どの場所に埃が積もっている。
まるで殺人事件のあった山荘のように。

誰かが入ってきた。

その誰かは廊下をまっすぐに歩いて行き、ヘッドホンが置いてある部屋の中から幾つかのヘッドホンを持ち出してこの異様な空間から出ていった。

暫くの静寂

その異質で異様な空間には一応表札がある。

《御手洗》

(みたらい)

これが表札に表記されていた名前だ。

御船が見ていた《書庫》の情報閲覧画面にも同じ名前があった

御手洗^{のつみ}乃海という高校三年生。

能力は《^{ブレンウオッシュ}特定洗脳》

それがどんな詳細かはわからない

《能力暴走》 #2（後書き）

全くこの文章力の無さ、どうにかしたいですね。

師匠みたいな人がいたらいいんですがいるわけないよねそんな人。

文章に関して指摘がありましたらお願い致します

《能力暴走》 #3 (前書き)

文章力ついてきたでしょうか？

《能力暴走》 #3

午前四時

柵山通留は自分の寮に帰っていた。

同じヘッドホンをつけた謎の三人組に襲われたあと、暫くはその三人組を探していたのだが見つからず仕方無く帰ってきたのだ。

（それにしても何だったんだろう…）
状況が全くわからない。

取り敢えずニュースを確認しようとパソコンを起動させる。
結構古い物なので起動が少し遅い。

パソコンが起動したのでマウスを操作しブラウザを立ち上げる。

五分ほどニュースを確認していた柵山の目に一つの記事が映った。

「第十三位が能力による洗脳を受けていた か」

それは、昨日学園都市第十三位の『灼熱地獄^{フレイズヘル}』、赤嶺煙路が何者かの能力によって洗脳され暴走していた、というものだった。

（もしかしたらあの三人組も洗脳されていたのかもしれない）

三人は何も喋らなかった。

柵山にそう思わせる程彼らのそれはおかしかった。

（だとすると犯人は一体何が目的で
）

柵山の思考に伴って学園都市の夜が明ける。

午後0時

朧江は病院での精密検査を終え、異常がないと判断されたため自宅

に帰ってニュースを観ていた。

勿論ニュースでは昨日のことが報道されている訳で

「第十三位が洗脳されてた　か。予想通りだな」

朧江はその事実がわかったところで、御船に連絡をとる。

呼び出し音が鳴る。

『相馬、なに？』

唐突に聞こえた声は、昨日のこともありまだ少し怒っている御船のもの。

「んあ、いや、退院したつてのと、第十三位が洗脳されてたつてホントか？」

先程得た情報の確認をとる。

『あんた復活早すぎでしょ……』

電話口からキーボードを打つ音が聞こえてくる。パソコンを使っているのだろう。

「いや、いいから洗脳の件を……」

『事実よ。だから今『バンク書庫』から『マリオネット洗脳能力』の持ち主を探してるの』

そのため、キーボードを打つ音が聞こえてきたのだろう。

「そついや赤嶺がヘッドホンを着けてたつてのは知ってるか？」

隴江は御船に訊ねる。

『知ってる。普段は音楽に興味ないらしいけどその日に限ってね。しかもそのヘッドホンは受信機付きらしいわよ』

多分どこかのコンピュータにハッキングでもしたのだろう。妙に細かく知っている。

「受信機？」

『それもかなりハイスpekな音声電波受信機ね』

音声云々よりもヘッドホンに受信機が付いているというのがおかしい。

「てことは誰かが指示を出してた可能性が高いな。それも個人じゃなくどこかの研究グループか」

『何でそう言い切れるの？』

隴江が言い切ったことに対して疑問を抱いたようだ。

「俺が昨日、意識を失う前にヘッドホンから男女の会話が聞こえてきたんだ。それにそんな受信機を付けれる人なんてその辺には居ないだろ？」

隴江は昨日あったことを交え、推論を話す。

『確かにそうね。やっぱりこの事件にヘッドホンが関係してることは間違いないかな』

御船はその説明で納得したようだ。

「そつだな。取り敢えず俺は洗脳能力者について調べてみるよ」

『うん、じゃあね』

返事をする前に電話が切れた。

「まだ怒ってんのかよ…」

今更その事に気付く。

（昨日煙があがってた場所に行ってみるか　　）

隼江は寮を出て、病院の窓から見えた路地の辺りに向かう。

そこで思わぬ再会があるとも知らずに

午後二時

戻ってきた。

昨日三人組に襲われた場所に柵山通留は立っていた。

「いや、なんでこんなところに？」

彼は誰かに向かって話し掛ける。

その視線の先には

隴江相馬がいた。

「なんでかって言われたら昨日の夜、煙があがってた場所に来ただけなんだけど」

隴江が言っているものは多分、昨日襲われた時に起きた小規模な水蒸気爆発の煙だろう。

「実はそれ」

柵山は彼に昨日のことを簡単に説明する。

「ヘッドホンねえ……」

意外なところに興味を示す隴江。

「多分そいつらは洗脳されてる。それも個人じゃなくてどこかの研

究グループにな」

「それは一体どういう…」

混乱する柵山に今までであったことを詳しく説明していく隴江。

「だからヘッドホンを使って洗脳してるんじゃないかな」

一通り説明を終えた隴江は近くにあった木箱に腰をおろす。木箱が軋む音が聞こえる。

『ヘッドホンを使って洗脳』、柵山にはその特徴を持った能力者に心当たりがあった。

「多分それが能力者の仕業とすると『ブレインウォッシュ特定洗脳』だと思うよ」

隴江は驚いたような顔をする。

「知ってるのか？」

柵山は頷く。

「うん、僕が通ってる高校にそんな能力のやつがいるんだ。特定のヘッドホンを着けている人にだけ洗脳が出来る『洗脳能力』なんだけど…」

「柵山、そいつの居場所わかるか？」

柵山は考える素振りを見せ

「多分自宅に居るんじゃないかな。結構暗い娘だったし」

「サンキュー、助かったよ。取り敢えず御船に頼んで調べてもらう」

わ
」

「うん、こちらこそ」

隼江は木箱から立ち上がると

「じゃあ俺もう行くな。色々助かった。ありがとう」
最後に頭を下げ、礼を言うと柵山に背を向けた。

「あ、ちょっと待って」

柵山は立ち去ろうとする隼江を呼び止める。

「んあ？」

立ち止まる隼江。

柵山の要件、それは

「電話番号交換しとかない？」

午後三時

隴江は第十八学区のほぼ無人の寮に来ていた。
この辺りには昼間にも関わらず全く人がいない。

彼は柵山と別れたあと御船に電話をかけて『特定洗脳』について調べてもらいこの寮にたどり着いた。
彼女の調べによると『特定洗脳』は本名を御手洗乃海。この寮に住んでいる唯一の生徒らしい。

見てみると一カ所だけカーテン閉じている窓がある。
階段の下にあった郵便受けの名前を見るとそこが御手洗の部屋のようだった。

隴江は螺旋状の階段の一段一段を踏みしめるようにして昇っていった。

午後三時十五分

外界から遮断されたように真っ暗な御手洗の部屋の中に朧江はいた。部屋の中には大量のヘッドホンがある。それも赤嶺煙路が着けていたものと全く同じタイプのものが。

しかし部屋の中には朧江以外の人間はいない。

人間は だ。

暗闇の中から何かが飛んできた。

「っ！」

朧江の足下の床が消し飛んだが、辛うじてそれを回避する。

どうやらレーザーのようなものが飛んできたようだ。

隼江はレーザーが飛んできた先を見て言う。

「へえ、学園都市は不都合があればこういう事するんだな」

彼の視線の先には直径1メートルくらいの球状の機械があった。いや、兵器といった方が適切かもしれない。

球体は宙に浮いていて所々小さな穴が開いている。どうやらそこからレーザーを発射したようだ。

球体が動いた。

ギョルルルルル

球体は回転しながら無数にある穴から何かとても小さなものが出るような音を出した。

「　　っ！！」

隼江の体表上を激痛が走る。何かに身体を蝕まれていくような痛み。無数のナノデバイス『オジギソウ』が彼の身体に噛み付いているためだ。

「チイツ！」

隼江は『ライティング雷光共鳴』を使い身体を電気に変換してオジギソウを全て破壊する。

そのまま身体を電気に変換したまま球体の後ろに回り込み身体を元に戻す。

バリッ！

球体の表面に手を当てた隴江はその接触面から球体に『雷光共鳴』の最大出力である六億ボルトの電撃を流し込む。

球体はある程度電気を遮断する素材で出来ているのだろうが、五億ボルトを超えた辺りで電撃を通した。

バチツ、バチバチツ！

回路がショートするような音が鳴った直後に、球体は大きな音をたてて床に落ちた。

「ったく、なんで御手洗乃海じゃなくてこんな球と戦わなくちゃならねーんだ…」

『オジギソウ』によって身体中から血を流している隴江だが、御手洗の居場所の手掛かりになりそうなものを探しながら不満を洩らす。

「おっ」

何かを見付けた彼の視線の先には、山のように積み重ねられているヘッドホンの中に混じっている二枚の紙。

それは名刺だった。

「第10心理研究施設研究員…東藤伝導とうとうでんどうと志津間和泉しづまわづみか…」

学園都市第七学区の窓の無いビルの中で、学園都市統括理事長アレ
イスターⅡクロウリーは呟く。

「『セカンドプラン 二次候補』に多少の誤差か
また『二次候補』。」

「つまらないことをしてくれる研究者だ
それが誰を指す言葉なのかはアレイスターしかわからない。」

《能力暴走》 #3 (後書き)

うむむ、イマイチ人気が上がってませんね…。

頑張って文章力をあげていきます！

感想、アイデア、合作者募集！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3282y/>

とある無力の能力記憶《skill memory》

2011年11月20日07時19分発行